



516 講談社現代新書

学問の世界

碩学に聞く

下

江上波夫

中国大陆に腰をすえ、調査研究した独自の成果、
欧米に留学し、赤ゲットぶりを発揮するなかで持ち返った

東畑精一

最新の学問と国際感覚 開かれた都市東京には、

いつの時代にも、新しいものを受け入れ、

松本重治

発展させる土壤がある。本書は、

中山伊知郎

東京を中心に活躍する上記の碩学四氏が、
師や友との交流、発見のよろこびを語りつつ、

人知れぬ困難と苦勞のなかで築いた学問のルーツを明かす。

戦前・戦後の日本の知的風土を知るうえでも貴重な書。

聞き手

加藤秀俊＋小松左京

上巻と併せて

一読されたい。



学問の世界——㊦

昭和五三年九月二〇日第一刷発行

定価——三九〇円

著者——加藤秀俊＋小松左京

© Hidetoshi Kato + Sakyo Komatsu 1978 Printed in Japan



発行者——野間省一 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二―二―三 郵便番号二二 電話〇三―九五―二二 振替東京八―三九三〇

装幀者——杉浦康平＋鈴木一誌

印刷所——凸版印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

0200-455169-2253 (0)

落丁本・乱丁本はおとりかえます (学1)

加藤秀俊＋小松左京



下問の世界 碩学に聞く ⑦

知識人、という手垢^{てあか}のついたことばをわたしはあまり好まない。好まないけれども、ときどき、いったい知識人というのはどこにいるのだろう、という疑問を心のなかで持つことがある。

もっとも、知識人がどこにいるのか、などという問いは愚問なのかもしれない。もしもひろい意味での知識人の条件が、高等教育をうけた者、ということであるなら、これだけ高等教育の普及したこんにちの日本では、いたるところに知識人がいる、ということになるだろうし、せいまい意味での知識人が、たとえば大学教授、高級官僚、作家、といった専門職であるとしても、日本には何十万人もの知識人がいるはずだからである。

しかし、ひろく定義しようと、せまくしぼってかんがえることにしようと、わたしのみるところでは、ほんとうの知識人はきわめてすくないのである。なるほどすぐれた大学教授や有能な行政官はいっぱいいる。そしてこれらの人びとはそれぞれの領域ですくなからぬ業績を積みあげてきている。しかし、こうした人びとと話していて、わたしは、しばしば苛^{いら}立たしくなり、さらに絶望的になってしまうのである。というのは、一見したところ「知識人」であるは

ずの人びとが、結局、「専門家」であるにすぎない、という事実に気がつくからなのだ。

これら多くの「専門家」は、当然のことながら、それぞれの「専門」とするところに関して、饒舌である。専門によってカバーされる範囲内については、微に入り細にわたってなんでも教えてくれる。しかし、かれらはひとたび専門のそとの話題になると、突如として貝のように黙ってしまう。黙ってしまうだけではない。専門外のことには、いっこうに関心をすら示してくれない。そのことが、わたしにはまことに残念なのである。

われわれの知的探求の対象は、ほんとうは無限のひろがりをもっており、そのひろがりのなかで、無関係にみえる事象がたがいにかかわりあっていることがわかったり、そのかかわりをじっと眺めているうちに、それまでかんがえたこともなかったような普遍原理がみえてきたりするものだ。好奇心のおもむくままに、自由に知的世界を探求するよろこび——そういうよろこびのなかに生きる人びとこそが、わたしにとっての知識人像なので、せまい専門にとじこまって、このまばゆいばかりの知的世界をうごきまわることを知らない「専門家」を「知識人」と呼ぶことをすくなくともわたしはためらってしまう。

要するに、こんにちの日本には、あまりにも「専門家」が多く、そしてあまりにも「知識人」がすくなくのである。ほんとうは、テレビに興味をもつ地球物理学者があってもよく、生化学に熱中する法学者があってもよろしい。なんとか「学」と名のついたもろもろの学問は、大学

の編成上、便宜的につくられたもので、べつだん、そんなものにムキになって義理立てするにはおよぶまい、とわたしはおもう。それどころか、「専門」の「学」のなかに身をちぢめてゐるなどというのは、あんまり感心した図とはみえない。

講談社のPR雑誌「本」から機会をあたえられ、親友の小松左京氏といっしょに「碩学に聞く」シリーズに参加して、わたしは、これまでのべたようなことをあらためて深く感じさせられた。というのは、わたしたちがおめにかかった先生がたは、ひとりのこらず、ほんとうの意味での知識人であつて、けつして、たんなる専門家ではなかったからである。もちろん、先生がたは、それぞれに専門をおもちであり、それぞれの領域ですばらしい業績をあげておられる。しかし、わたしのみるところでは、この先生がたにとっては、専門というのは、いわば根拠地、ないしは戸籍上の本籍のようなもので、ときにはそこに戻られるが、どこにでも自由自在に出没するのびやかな精神をおもちなのである。そのとらわれない自由さにわたしは感動した。

それは、ひょっとすると、「明治人」というものに特有な資質であるのかもしれず、もしも、そうした時代的条件のもとにこれらの先生がたのすばらしい精神があるのだとすれば、わたしなどは、ただそれをうらやむのみということになるのであるが、同時に、なんとでもして、この知的伝統を継承できるものなら継承したい、という気持をもおさえることができない。ほ

んとうの知識人というものがどういうものであるのか、をこの対談によって知った以上、先生がたから学んだことをわたしたちの世代がすこしでもうけつぎ、それをさらにつぎの世代に渡してゆくことこそがわたしたちにとっての義務であろうか、とおもうのである。

目次

まえがき——加藤秀俊……………2

1——江上波夫——騎馬民族説の背景と周辺……9

1——考古学への道 10

2——興安嶺を越えて 15

3——オングト族とは何者か 25

4——ヨーロッパ史でない世界史を 37

5——騎馬民族と世界文化 41

6——征服王朝の論理 48

7——騎馬民族説のアイディア 53

8——馬具が語るもの 59

9——学問の広さということ 64

2 — 東畑精一 — 農業と農学と農政と…………… 67

1 — 農学へ進む 68

2 — ウィスコンシンへ 77

3 — アメリカ農学から学ぶ 84

4 — シュンペーター先生の思い出 87

5 — 日本の農政を担う 95

6 — 東畑式組織管理法 100

7 — “アンブランド”の生き方 106

3 — 松本重治 — 国際交流の開拓者…………… 111

1 — 祖父・父・そして私 112

2 — 一高・東大時代 121

3 — 赤ゲット・アメリカ行 129

4 — エール大学で学んだこと 132

5 — 小春日和のヨーロッパ 139

6 — インターナショナル・

ジャーナリストへの道 149

7 — 国際文化会館の設立 161

4 — 中山伊知郎 — 体験的経済学史…………… 167

1 — 商法講習所のころ 168

2 — 経済学、二つの流れ 176

3 — ドイツ、アメリカ留学時代 184

4 — 数理統計学一筋に 194

5 — 戦争中の戦争経済研究 198

6 — 一橋カラーということ 204

7 — 自動車とこれからの経済学 216

1 江上波夫——騎馬民族説の背景と周辺



〔えがみ なみお〕

一九〇六年（明治三九年）東京生まれ。

東京大学文学部卒。

東京大学教授などをへて、

現在、同大学名誉教授、上智大学教授。

騎馬民族征服王朝説は、

日本の古代史研究に新画期を与えた。

著書は、『ユウラシア古代北方文化』

『アジア 民族と文化の形成』

『騎馬民族国家』ほか多数。

1——考古学への道

加藤 最近のご旅行はどちらですか。

江上 シリアです。トルコとの境に接した北の方で、ユーフラテス川にダムをつくっています。そこに人工湖ができて水没する遺跡が非常にたくさんあるのです。ユネスコの勧告で各国が行って、それぞれ遺跡を分担して掘っているわけです。埋蔵文化財を少しでも救うために。

小松 年代はどのくらいのものでしょうか。

江上 古いところから新しいところまであります。古いところでは紀元前四千年くらい、新しいところはビザンチン時代、イスラム時代ですね。

小松 そうすると、ベルシアも含んで。

江上 含みます。しかし、おもしろいのはシュメールからバビロンの時代にかけてです。

加藤 話がいまの問題からさかのぼるようなことになりますけれども、江上先生の考古学への関心は、いつごろからどんなふうにしてお生まれになったのですか。

江上 私の中学校はもとの府立第五中学、いまの小石川高校です。そこの初代の校長伊藤長七先生は非常にえらい人でして、何でも自分のイニシアチフでやれ、自由に、開拓とか創作とか

を盛んにやれ、そういうことをいった人でした。都会の子に疎遠な労働とか、自然の生活とかにも関心を持たせようと夏休みに信州に連れてゆきまして、そこで私たちは田の草とりとか、河原の石積みとか、いろんなことをやらされたのです。一日五十銭の日当をもらったのです。そのかわり山にも連れて行ってくれたり、いろいろしたんですけれども、その伊藤先生が連れていってくれた志賀村という村に神津というなかなかえらい学識のある村長さんがいました。

加藤 赤壁、黒壁という家のあるところですね。

江上 その家に行ったら、二つ部屋がありまして、一つは島崎藤村の原稿とか彼の著書など文学書が集めてある。一つは石器とか土器がいっぱい並べてある部屋でした。われわれは藤村の方はそのときあまり興味なかったけれども、石器とか土器に非常に興味を持って、どこにこんなものがあるかと聞いて、神津さんに連れて行ってもらった。なるほどいっぱい落ちているんです。非常に興味を持ちまして、それをみんなで拾った。そんなことが最初にありました。それから、私は丈夫だったのですけれども、チフスになってから非常に弱くなって、人間のかかる病気は大概のものをやったのです。中学三年、四年、五年と学校にはほとんど行けなくなって、病院暮らしをしたり転地したりしていたんです。

校長が私の顔を見るなり、いっさい学校に来なくていいというんです。君はからださえ丈夫にすればいいんだから、来るな、君のおとうさんとも約束したんで、どんなに来なくても落第

させないから、安心して休めというんです。昔はえらい先生がいたんですね。たまに行くと、顔色を見て、「まだダメだ、帰れ、帰れ」という。

そのころ転地していたところが外房の興津おきつでして、少しよくなってから毎日海岸に行って、海女と一緒に断崖下の岩磯をずっと歩き回って、そこにいるタコだとかサザエなどを採ることばかりやっていたのです。それがからだによかったんですね。

そうしましたら大震災になっちゃった。ちょうどそのころ東京にいたんですが、東京にいたってしょうがないから、興津に戻った。そうしたら、いままで海水が来ていて通れなかった断崖下の岩場があったんですが、そこが四、五メートル隆起して、歩いて、廻れるようになったのです。そしてそこに、大きな洞窟があって土がいっぱい詰まっていて、そこに土器の層が出ていて、動物の骨が含まれているんです。

これはおもしろいと思ひまして、東大の理学部の人類学教室に報告に行ったんです。そうしたら、地理学の山崎直方先生とか、解剖学の小金井良精先生とか、人類学の松村瞭先生とか、みんななくなりましたが、えらい先生方が見に来られるということになった。ご覧になって、この遺跡が非常におもしろいというんです。というのは、地震ごとに上がった下がりする遺跡なんですね。沈んでいる時は水が入るでしょう。沈澱層がそこに出来る。隆起すると人が住む。それを繰り返しているわけです。それで地震による上下運動が遺跡の堆積の間

に何度あったかわかる。こういう洞穴はイタリアにあるそうですが、日本では初めてだそうです。

とてもいいものを見つけてくれたといって喜んでくださって、私に、理学部に来いといわれるのです。私は文科的な人間らしく、理科はいやだと思って高等学校の文科の試験を受けたら、それまで三年間ほとんど学校に行かなかったのに入学出来たのです。これはもうけものだと思ひまして、それから高校時代は好き勝手なことをしたんです。できるだけ怠けて、八十日休んだら落第というのに、七十九日くらい怠けて……。おかげでからだも丈夫になりました。

小松 高等学校は……？

江上 浦和なんです。今日出^{こんび}海氏が二年上にいました。そんなことで、徹底的に怠けたけれども、その間に少し勉強しようと思ったのは、人類の文明はどうして起こったかということ、とくに法の発生ということ、そのときに、それに関係のあるような本をいろいろ読んで、だんだんと文化人類学に興味を持ったのです。

それで東大に行って法の発生の問題をやるかと思ったのですが、法科の教室が焼けて、みんな朝早く仮りの教室へ席を取りにいかなければならないのです。私にはとてもそんなことはできないから、もっとのんびりとやれるところはないかといったら、それは文科の歴史か何かだろうというんですね。しかし、日本のことをやっていたのではせまくるしいだろうか

ら、東洋史ならということで、からだにもあんまり自信がなかったので、東洋史に入ることにした。

そんなことで入った東洋史だけれども、歴史となるといろんな語学もしなければならいし、たくさん本も読まなければならない、覚えなきゃならないが、大陸考古学をやったらのんびりしていいだろうと思って、(笑)それでやったわけですよ。中国はうるさいから、うるさくないところというと、北の蒙古やシベリアならあまりひともやってない、そこがいいだろうと思って、けっきょく北方ユーラシアをやることにしたのですけれども、一つは放浪民や遊牧民に対する興味があったんですね。

加藤 それはどのようなところから……。

小松 大正、昭和の初めだったから、遊牧民の社会そのものがはつきりよくわかっていなかったでしょう。

江上 私は文学でジプシーに関する、たとえばジョージ・バローとかメリメなどのものを読んでいるうちに、何か私の夢をそるものがあって、放浪生活や遊牧生活をもっと知りたいと考えるようになった。とくに大昔はすべての人が放浪生活だった、そういうものからどうして人類の多くは定着するようになったか、そんなようなことも研究してみたいなどと考えて、遊牧民をやることになったのです。

大学に入って間もないころ、コズロフというロシアの將軍の率いた探検隊が蒙古で匈奴の墓を掘って、そこからいろんなものが出た。中国産の絹や玉、漆器などもあったし、中央アジア・ローマ風のデザインの毛織物などもあったけれども、いわゆるスキタイ系の遊牧民文化のものが主流をなしていたというようなことから、匈奴に関心を持ったし、スキタイ系文化もやってみようと思って、卒論の題目には匈奴の文化を選んだのです。

小松 そのころ日本では遊牧民の研究というのは珍しかったのではないですか。

江上 はい、ほとんどなかったですね。

小松 そうすると、何もかも……。

江上 伊藤長七先生じゃないけれども、人のやらないことをやれという……。

加藤 日本に住んでいると、遊牧民というものの存在さえ信じられないですね。

小松 東南アジアの米作地帯でも入っていませんけれども、日本というのは遊牧文化みたいなものがほとんど社会の中に入り込まなかったところがありますね。

2 — 興安嶺を越えて

江上 ところが日本の東洋史、また日本の人類学、民族学は遊牧民研究を意外に早くからやっ